

## 水腎症、水尿管症

水腎症・水尿管症とは、画像検査で通常は大きく膨れて見えないことのない、腎盂や尿管が膨れて観察される状態のことを呼びます。

その原因は、尿の流れ道に狭い部分がある（腎盂尿管移行部や尿管膀胱移行部など）、尿の流れが妨げられている（尿路結石など）、膀胱尿管逆流現象がある、腎尿路異常がある、など様々な可能性があります。水腎症を認めた場合には、原因が何であるのかの検索が大切です。

症状は程度が軽い場合、無症状のことが多いですが、尿路感染症や反復する腹痛、嘔吐の精密検査で発見される場合があります。

また一回の検査で水腎症を認めなかったとしても、尿が貯留したときだけ水腎症が悪化して、腹痛などの症状が出る間欠的水腎症と呼ばれる病態もあるため、注意が必要です。

水腎症を指摘された場合の管理は、その原因や程度、症状によって変わってきます。水腎症の程度は、日本では Society for Fetal Urology (SFU)分類と呼ばれるもので示すことが多いです。

お母さんのお腹にいるころから、超音波検査で指摘されることも多くありますが、程度の軽いものの場合、生まれてから自然に水腎症を認めなくなる場合も多いため、症状がなく、水腎症の程度の軽いものは、腹部超音波検査で定期的な経過観察が行われます。

しかし、水腎症の程度が強い、水腎症が悪化する、強い腹痛などの症状を認める場合には、更に精密検査や治療が必要となる場合があります。尿の流れを見るために利尿レノグラム検査などの画像検査を行って、原因の除去のために外科的治療が必要となる場合もあります。いずれの場合も経過を観察していくことが重要ですので、例え症状がなくても主治医の先生と相談しましょう。

図 水腎症 SFU 分類

